

反対運動を起こし、大谷派も応援して、長い苦勞をかさねた結果、2023年に計画は中止されました。

2024年1月1日、10秒間の震動で円龍寺の本堂が真っ二つに裂けました。塚本住職が本尊の阿弥陀如来の無事を確認して庫裏にもどると居間が崩れ落ちて、坊守(妻)の詠子さんが瓦礫の下敷きになっていました。塚本住職が足に重傷を負った詠子さんを何とか助け出しましたが、高屋敷地区に通じる道路はすべて壊れたり土砂が崩れたりして通れず、港も土地が隆起して船が使えなくなり、避難所も土砂崩れの危険性があるため使えず、停電と断水のなかで100名ばかりの村民は完全に孤立してしまいました。そして雪が降ってきました。人々は20台ほどの自動車を広場に集め、その中で寒さに震えながら過ごしました。1月3日に詠子さんは一人の妊婦とともにドクターヘリで運ばれ、塚本住職と村人が避難できたのは1月12日のことでした。こんな地震に弱い場所に巨大な原発が建てられようとしていたのです。もし反対運動がなければ、 Fukushima以上に怖いことが起こっていたかもしれません。しかし大谷派の反対運動のせいで原発が造れなかったのが珠洲市は経済発展から取り残され、人口が半分になってしまったとなく人々もいます。私たちは経済と環境の矛盾のなかで生きています。この矛盾を解決して人々の幸福を実現することもまた浄土真宗の課題です。

第3章 真宗と平和

「和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物の終り」(『摩訶止観』6・下)という言葉、蓮如上人は使いました(『御文』3・11)。仏法に近づけない人のために、仏はかりに神となってその人と縁をむすんで、ついに仏法をさとらせるという意味です。だからそういう如来大悲の心を知らないで、自分に正義を立てて、神社や他の宗教を劣ったものと軽蔑して批判してはならないと蓮如上人は諭すのです。この教えで今のガザ地区のことを考えてみたらどうでしょうか。どちらも自分が正義で相手は悪だと決めつけて戦っているのですが、やっていることはどちらも悪になってしまっているのです。親鸞聖人が最も尊敬した聖徳太子は、「争いにはどちらか一方が絶対に正しいということはありません。ともに凡夫があるだけだ」「和をもって貴しとなせ」と言われましたが、この「和」はたんなる政治的な平和のことではなく、「和光同塵」という如来の大悲を貴べということであり、すべての人が自分は凡夫だという自覚に立って如来をうやまえば、政治的な駆け引きをしなくても自然に平和はおとずれるという教えです。凡夫とは愚かということではなく、宿業によって成立している自分だという意味です。

この蓮如上人の教えを何より大切にしてきたのが能登の門徒であり、そのため能登には宗教の対立がほとんどありません。宗教は対立ではなく対話すべきものです。間違っても戦争の原因になってはいけません。能登には「コンゴウ」という独特の真宗行事があって、その時は神社の神様や他宗の菩薩も自由に受け入れられます。そして真宗門徒の子供が他宗の家の嫁や婿になった時、その家の人も真宗のお寺の「コンゴウ」にお参りするのです。それで「コンゴウ」にはとてもたくさんの人が集まり、一緒に法話を聞き、ごちそうをいただくこととなります。このように「コンゴウ」は他宗の